

書評 尾崎芳治『経済学と歴史変革』

(青木書店, 1990年)

梅 垣 邦 胤

はじめに

本書は、90年代から21世紀にかけ、この将来を展望、模索する上で、貴重な知的刺激を与えてくれる、内容豊かな研究書である。その稠密な文体から発せられるメッセージは、ほとんど要約を許さないほどの完成度の高さを維持している。従って、その全体像を要約した形で提供するといったことは、もとより評者の課題とはなりえない。一つの主観的なコメントをするといったことに目標は限定される。

本書の副題は、「労働指揮権としての資本・生活意識・土地所有」となっている。この副題においてすでに、本文の内容を象徴的に暗示している。「資本」といった場合、普通には、労働、土地とならぶ所有対象の一つとされている。あるいは、安定的かつ最大限の剰余価値・利潤の獲得をめざす運動体とされてきた。それに対して、ここでは、資本をして、就業人口のなかで圧倒的多数をしめる賃労働者にたいして、その労働に対して指揮権をもっているものと規定しているのである。財産と生産の諸要素及び情報を独占する少数者とその指揮のもとで労働を遂行する多数者、この両者の関係に資本主義の一つの特徴を見ている。「生活意識」、これもまた、本書の特徴を示している。現代の、資本主義であれ、社会主義であれ、あらゆる社会システムは、その下で生活する人々の同意、共感、服従なしには、存続しえない。それが、限界に近づいた時、一社会は違った社会システムを選択すべく模索をはじめめる。社会システムの維持と変革とは、したがっ

て、客観的な社会システムの提示とともに、広く深いレベルでの人々の日々の生活意識がそれを選択しない限り不可能である。生活意識という言葉はその点に注意を促している。最後の「土地所有」、これは資本主義分析において、真に不可欠な理論装置として、定置されている。理論の独創性とは、人間の認識が、より深く、より緻密に対象に分け入り、新しい真理をまた一つ我々に提示するところにある。資本主義分析における土地所有範疇の導入はその一つの実例をなしている。

内容は、それぞれ独自の意味を持つ三つの部分から構成されている。Ⅰのテーマは、資本の創成である。ここでは、資本主義の成立が二重に把握されている。一つは、旧体制から歴史を画する資本主義の生成である。他は、一旦成立した資本主義が、一国内においていまだ商品・貨幣経済も資本関係も知らない地域・セクションに浸透していく過程、つまり内包的な過程である。資本主義の端緒的生成、そして、その資本関係が非資本主義の関係を打破していく過程である。ここには、次の二つの論文が収められている。資本・土地所有・賃労働——「本源的蓄積」の理解によせて——、および、貨幣の資本への転化——「論理＝歴史」説を超えて——である。いずれも、現実整合的な、したがって、現代について思いを巡らす確かな素材を与えている。

Ⅱは、資本主義的生産＝生活過程と未来社会とされている。ここで注目されるのは、一日の中で互いに区別されると思われていた生産と生活が、等号関係に置かれていることである。先の副題の生活意識の重視と重なるようなテーマの探究を暗示させる。また未来社会に関する模索の素材が提供されている。ここには、次の4論文が収められている。1、歴史変革と生活意識、2、資本関係と歴史変革、3、流通・労賃幻想と「階級としての労働者」、4、「資本主義時代の成果」としての「協業と共同占有」および社会的生産＝生活過程の《人間化》と「個人的所有」、この4つである。

Ⅲは、近代的土地所有の歴史理論である。主論文として、ブルジョアの土地変革の理論、また、レーニンの「二つの道」理論とイギリス革命の土

地変革、および二つの書評から構成されている。

まえがきでは、「社会とはいつでも、その時代の人間の生きざまの総体である」とされている。時代、人間、生きざま、ここには、時代の内容が不変であるようでいて、また転変していくもの、そこで人間は従属変数として編成される側面と、独立変数となる側面もまたもっていること、その総体が生きざまであるとされている。研究書が現代に生きる全ての人々のなかで読まれ、共感され、批判される時、その研究は広く我々のなかで息づくことが出来る。そのような期待を懐かせてくれる言葉であろう。

以下、簡単に、本書の諸論点をまとめた。

第一章

論点のいくつかについて、概観することが、ここでの課題である。やや箇条書き的となるが、いくつか取り上げてみたい。

第一の論点は、対象とその認識の関係についてである。社会科学の特有の複雑さは、認識主体も当該社会において一定の階級に（意識的であれ、無意識的であれ）所属し、その利害関係に規定されているところにある。そのような目から見た社会像がいかに客観性を保持しうるか、それが問題である。マックス・ウェバーは、価値判断からの自由、没価値性を唱えることによって、主観から自由になりうるとした。宇野弘蔵が問題としたのもこの社会科学における客観性であった。宇野は、資本主義における循環的側面を強調することによって、そこに到達出来るとした。しかし、もともと、池上（池上惇『現代国家論』青木書店、1980年）が言ったように、社会は、循環法則と移行法則の両面を視野に収めることによって、初めて科学性を獲得することが出来る。宇野は、循環を言うことによって、逆の主観性の陥穽にはまっていたのである。

認識主体自体が、当該社会に身をおき、生きている人間である。過去の研究は、自らの理論はそこから免れていると言うことによって、客観性に

到達出来るとした。しかし、尾崎はそう見ていない。認識主体が当該社会に身をおいているという事実は、消しきることは出来ない。しかし、対象に深く分け入り、真理に接近するのは、その当の限界を持った認識主体でしかあり得ない、とする。そこに、我々は、理論の相対性と同時にある限界の中での絶対性を獲得しうるのである。

尾崎は、その「深い意味」について思いをめぐらす時、経済学はその限界と科学的客観性を同時に獲得できる、と言う。

その上で、真理性の基準が、対象に対する認識の真理性にもとめられている。真理に到達しうる道は、人の頭脳の中にあるのではなくて、それが、情報を蓄積し、様々なルートを辿り、試行錯誤を繰り返しながら、少しずつ接近していく対象把握の内容にある。

尾崎は以上の前提を指針として、『資本論』の方法とする。理論は、その諸々の範疇が、「具体的総体としての資本主義を構成している実体的諸契機、その諸側面、およびそれらの客観的相互関係、についての直観と表象の、概念への加工の産物であるかぎり、現実的であるにすぎない。いずれにしろ、生きた総体としての資本主義についての直観と表象という現実的素材と根拠をぬきにしては、およそどんな範疇の定立もその展開もありえないのである。」

対象としての資本主義を、直観と表象によって、まずとらえるその意味を強調している。瑞々しい感受性が科学において持っている大切な意味を確認する。それが、対象とその認識をその端緒において媒介する。認識はそこから、対象に暫時ふみこみ、概念として、諸範疇、法則に到達するに到る。

『資本論』の理論は、つまり資本主義の「現実の相互関係」にしたがって構成されている。このような把握は、上の認識論の経済学への具体的適応であるとともに、『資本論』研究史において、論理＝歴史説への鋭利な批判となっている。論理＝歴史説は、論理の歩みが抽象的なものから具体的なものに進むかぎり、また簡単なものから複雑なものにすすむ限り、歴史

的發展過程を反映するとし、論理と歴史の照応関係を説くものであった。この説は、論理と歴史の移行と発生を強調する点で、循環論を越えている。しかし、資本主義の一定の相対的把握(例えば、冒頭商品論は、前資本主義の、単純商品であるとともに、資本主義における抽象的な商品でもあるといった)を内包している点で克服の余地を残していた。尾崎は、この点につき、資本主義の実体に規定された理論的把握が第一義であり、歴史はそれを「二次的に」うらづける限りでの重要性を持つとし、論理と歴史の関係把握において、一步前進した解明を行った。

第二は、『資本論』の骨格についてである。尾崎は、それを、次の二項にわたって整理している。

(1)第一巻は、二筋の糸と、三つの点で構成されている。二筋の糸、その一つは、労働の社会化と、貧困化・労働の疎外である。資本主義は、旧体制に比し、生産拠点において、また世界市場にまで到る社会的分業において、労働の社会化を達成した。しかし、同じ労働の社会化は、資本・賃労働関係によっておこなわれているが故に、貧困化と労働の疎外に帰結する。資本主義の肯定的と否定的、両面的な把握である。そこに、循環法則と移行法則が共に作用する客観的根拠がある。二筋の糸の他の一つは、労働者の階級結集および、その能動的作用である。資本主義の日々の生活(生活意識)そのものが、労働者階級の間、すでにある労働の社会化を土台として、変革への能動的因子となる展望をしめしている。

三つの点について。1つは、歴史的に与えられる、所有の対象と所有の主体である。2つは、所有対象と主体の性格である。資本家、賃労働者がどのような運動の過程において、資本主義と特徴づけられるのか。その性格規定である。最後に、1、2に重なるように打ち出されてくる、所有変革の仕方である。

このように、二筋の糸と三つの点を念頭におき、『資本論』を研究するならば、尾崎が発見したものとはことなつた論点を提示出来るかも知れない。今後の探究の指針ともなる論点である。

(2)『資本論』が、対象とした資本主義は、資本、土地所有、賃労働の三者が、排他的に一社会を支配し、総体としてこの関係が完成されていくものである。三者の関係は、以下の四点にまとめられる。

1、完成された資本主義は、資本が社会的生産の全面を支配したということである。それは、社会の労働が全て賃労働になることと同義である。

2、労働がすべて賃労働になっていることは、土地所有がすべて、直接生産者の土地所有を排除する土地所有、すなわち近代的土地所有となっていることである。

3、近代的土地所有は、資本に土地経営を許し、その限りにおいて差額・絶対の両地代をみずからの経済的実現形態とする。

4、賃労働は、資本がいなければただの「遊離労働力」である。

ここには、土地所有範疇を導入することにより、それとの相関で、賃労働の析出の必然性が証明されている。評者も、かつて、この土地所有の権能につき、駆逐の権力、また逃げ場の剝奪と規定した。資本・賃労働関係とは区別された、資本主義の生産関係の把握である。

第三の論点は、生産と生活についてである。今まで、一般的には、生産とは物の生産であり、生活とは、人が生産から解放されたところにあるとされてきた。しかし、尾崎はそう見ていない。生活は、一人一人の一日の全てである。諸個人の生きざまの総体である。労働し、取得し、消費するそのすべてが生活なのである。したがって、生活のなかに、生産行為、労働も含まれる。

生産手段と言い、生活手段と言う。しかし、上のように見れば、生産手段は、労働にとっては、その労働の生活の手段となる。また、生活手段は、それにより、人はリフレッシュするのであるから、労働力の生産手段となる。生産と生活は、形式的に分離、対立するような関係には立っていない。

ここからは、さらに二つのことが、導出される。研究史において、資本主義における賃労働者につき、確かに生産手段の所有からは排除されているが、事実として、生活手段は所有しているとの理解が有力であった。し

かし、生活過程のなかに労働が含まれており、生産手段は所有していないとすると、彼はその生活の全面を自らのものとは出来ていない、つまり生活手段を、所有していないということになる。尾崎は、これを「貧困の構造」としている。これが一つ。次は、生産は生活の生産であるという基準をすえて、階級社会、すなわち、奴隷制、農奴制、資本制をみるとき、これらは、いずれも生活の生産ではなく、剰余労働の生産を目的としているという点で、生活や生産において、本質的に疎外されたシステムであることが分かる。

以上、第一に、認識論について、次には、『資本論』の骨格について、第三に、生産と生活について見てきた。それぞれ独自の深い対象認識の跡を確認できた。つぎには、章を変えて、一步具体的な資本主義の諸範疇、および未来社会に関する言及点等を概観したい。

第二章

I 資本主義の一般的土台は、一社会、さらに世界市場レベルにまで広く、深く浸透していく商品・貨幣経済である。資本は、その土台の上で、商品・貨幣の無数の網の目をくぐりつつ、商品生産と、剰余価値の蓄積を行っていく。この様な、客観的な相互関係に規定されて、『資本論』は、商品、貨幣、資本という序列で編成されている。ここでの若干の論点を見る。

第一は、商品、商品社会についてである。一般的には、この商品経済については、政治的民主主義の問題ともからめて、個人の自立性、民主主義を実現する経済的土台と位置づけられてきた。つまり、資本・賃労働関係は悪だが、商品関係は善であると。現在の社会主義が選択している路線もそのようなものである。価格メカニズムによって、生産と消費のバランスは保たれるとしている。しかし、尾崎はそうは見えていない。商品生産社会においては、生産者は、一方では、社会的分業の中で相互依存の関係に立っている。しかし、他方では、私的所有に規定され、その同じ生産者の相

互の関係は、競争、敵対であり、またすべての生産者は、そこではたえざる動揺と将来展望からの疎外の中にいる。「生産者個人は、たがいに社会的分業で結ばれあい依存しあっているが、私的生産者としてたがいに孤立し、敵対しあい、闘争しあいつつ、自らの生産条件、生活条件、生存条件を、不断の動揺、不安定、偶然にゆだねて生きるしかありません。かれらの商品交換における相互闘争が即ち競争です。」ここには、資本・賃労働関係が登場する以前に商品レベルにおいて、資本主義の歴史的限界が示されている。

競争と孤立、敵対が商品生産の特質であれば、ブルジョア民主主義はその上部構造であるがゆえに、その本質は、財産の点で不平等な商品生産者を平等と見なすものであり、結果的に貨幣と資本の自由な運動の枠組みを提供するものである。

賃労働は、労働力を貨幣換算し、商品として販売する。これについて、転化論に則して、生産手段からの自由、身分制からの自由、この二重の自由が、商品化の前提とされてきた。うへの商品の規定にてらせば、この自由は、商品であり、商品となる限りでの自由であるから、当然、賃労働者は絶えざる不安定の中に生き、相互に敵対と競争の関係におかれることとなる。そこに、資本による商品の消費権の行使としての、労働指揮権の遂行と、また相互競争が資本の労働者にたいする恰好の支配の武器となっている現状を示唆することが出来る。

第二に、すでに、若干触れた大工場について。工場においては、集団的労働は、直接に社会化されており、そこには、組織性、規律性、指揮・監督が要求される。そのような集団的訓練を受けた新しい人間類型が生まれてくる。しかし、資本主義においては、集団的労働とその生産力は、資本の生産力、剰余価値の生産に転化する。ここには、一方では、社会化された労働が、資本・賃労働関係を凌駕し、その純粋な姿を定着させようとする傾向がはたらく。変革主体の形成である。しかし、他方では、資本関係を保持し強化する傾向もまた強まる。資本独占の強化である。このせめぎ

あいと矛盾関係の中で資本蓄積がおこなわれる。

研究史において、上の直接に社会化された労働につき、資本主義において、すでに達成された成果という説が、『資本論』の「否定の否定」に関する一解釈としてある。確かに工場内において労働は社会化されている。しかし、それは資本関係に服属したものである。したがって、直接に社会化された労働は、純粹に表れない。また資本主義において、すでに達成されているとすることは、歴史変革の決定的意味に無関心な把握である。なお、歴史変革との関連で、尾崎は、「階級」につき、客観的な経済的階級および、自らの地位を自覚し、みずからを組織した「行動する主体としての人間集団」とを区別し、変革主体にふれている。

第三に、未来社会について言及の跡を見る。未来社会を、労働者の解放、剰余労働時間の短縮、生産力の飛躍的發展に支えられた労働時間の短縮とすれば、それは、労働からの解放となる。しかし、未来社会において、実現されるのは、第一義的には、労働そのものの内容が変わることである。「人間的な労働の総体性を回復」する。解放は、労働からの解放ではなく、卑しめられた労働、生存の手段となった労働からの解放である。自由時間は、自由な労働との相関のもとで把握される。前に、資本主義における二重の自由について、商品にそくしてとらえた。未来社会においては、二重の自由は、疎外からの自由および、賃金奴隷からの自由として、真の自由を獲得する。

その前提は、私的所有の廃止である。それは次の3点として、具体化される。一つは、商品生産の廃絶である。また私的所有と社会的分業の固有の「間接的社会化」の廃止と全社会的規模での労働の直接的社会化である。最後に、物によって人が支配されるという、資本主義における疎外の止揚、偶然性、媒介性の止揚である。ここには、商品生産が、歴史的には限界をもった生産システムであることがその固有の特質とあわせて指摘されている。

未来社会については、とりわけ、先の「否定の否定」に係わる「協業と

生産手段の共同占有とにもとづく個人的所有の再建」につき、それは、個人主義的な狭隘性を持った所有とは遠いものとし、五つの循環形態にまとめていく。

1. 共同的生産から共同的生産に回帰する循環。
2. 共同労働から共同労働への循環。
3. 労働力の個人的所有・生産手段の共同占有の循環。
4. 労働生産物の個人的・共同的取得・消費の循環。
5. 生活手段の個人的所有・個人的消費＝主体としての人間そのものの生産の循環。

これらは、一定の必然性をもってこのような順に配置されている。1の共同的生産循環は、過程の起動力をなすが故に最初におかれている。生産と再生産の循環である。2の労働循環は、1の生産循環の能動的基礎である。3の共同占有循環は、生産と労働における社会関係の生産と再生産である。4の取得と消費の循環は、1から3までの結果を総括する。5の生活手段の所有と消費の循環は、4の一部分であるとともにまた独自の意味をもつ。過程の「人間化」された目的の達成を総括するだけでなく、「その繰り返しのうちに進行する主体の人間の発展の、したがってまたかれらの享受能力と諸能力との全体的な発展の、物質的基礎の累進的拡大を、直接に表示する形態である。」『資本論』は、資本主義の発展の、機械制大工業と資本主義的農業の発展の極限のかなたに未来社会を展望していた。上の尾崎の未来社会論は、その展望からけっして逸れることなく、かつ内容豊かに、緻密に理論化したものである。そして、急いで付言すれば、未来社会の諸規定は、労働過程の諸規定が純粹に、資本関係によって隠蔽されることなく姿を表しているのに気づくのである。以上、資本主義および未来社会にかんする尾崎理論の概略である。

Ⅰ ここでは、本書の最後の柱である、ブルジョア的土地変革の理論が見られる。

第一は土地変革について。土地変革は、それぞれが、二つの段階からな

る、二重の移行過程をたどる。まず、農民の現物経済が商品経済に転化する過程がある。分業を基準にして見ると、ここで、前後が区別される。現物経済においては、その共同体の内部において、性、年齢、得手不得手等にもとづく分業が行われる。また、身分の上下はそれ自体、支配と被支配という分業関係となっている。あるいは、家族内においても、分業がある。しかし、商品経済が生じてくると、それは、私的所有者の関係として、自立化と孤立化を特徴とするが故に、上の共同体内の分業は解体され、私的所有者同士の交換の前提としての社会的分業が暫時支配的となっていく。次に、後半は、その商品経済が、資本主義的商品経済に転化していく過程である。ここでは、小経営に特徴的であった、土地と労働力の一体性は過去のものとなり、土地は、資本主義的農業経営に適合した形態をとるようになり、労働力は、賃労働者として、資本のもとに編成される。つまり、現物経済の商品経済への転化と商品経済の資本主義的商品経済への転化である。

このような、土地変革の中で、農業は、資本主義的農業と資本主義的土地所有との相互促進と相互の矛盾関係のなかで、全体として、封建的農業生産は、資本主義的農業生産に歴史的に移行していく。その前提は、封建的農業構造に内在している。それを見よう。

第二、封建的農業構造では、封建地代が一定化するなかで、農民の手に「利潤」が生じてくる。しかし、他方その農民に対しては封建的土地所有はなお抑圧的に作用している。これは、一つの矛盾である。それは、領主の側では、抑圧の強化、自由への敵対としてあらわれ、農民の側では、その自立性の強化への衝動を強める。封建性から資本主義への移行は、農業のブルジョアの進化であるが、それは、したがって、領主が抑圧を維持しつつブルジョア化していく傾向と、農民がブルジョア化していく傾向との錯綜、せめぎあいを一つの内容としている。

一国資本主義を見る場合、いままで、ややもすれば、もっぱら地主的な道を歩む国と、もっぱら農民的な道を歩む国といった類型的の把握がなされ、

また地主的な道が、資本主義化が阻止され、前近代的段階にとどまる国とされ、農民的な道のみが、資本主義化する道と把握されてきた。尾崎は、そのような解釈からは無縁である。歴史的移行過程においては、領主経済も、農民経済とともにブルジョア化の道を歩みはじめる。故に矛盾は、領主経済のブルジョア化か、農民経済のブルジョア化かの間にある。ここには、現実整合的な分析が提示されていると言えよう。

おわりに

以上、本書の概略である。総じて、資本主義の歴史的生成、資本・土地所有・賃労働の相互前提と相互規定関係の内にその自立と歴史的限界を見出す視点、圧倒的多数の社会成員の中における競争、変動、搾取、集団的生産の中で、変革の主体的推進力が醸成されるという視点、未来社会を志高いものとして、科学と文化と労働における創造的努力を通じて人々の社会関係の豊かな可能性が生まれるとしている点等、印象的である。

要約は、対象を大雑把に把握するには便利である。しかし、要約には、同時に対象に内在していた多くの論点を欠落させるという欠陥が絶えずつきまとう。特に、本書のような、大部の研究書の場合、その本筋を捉えた要約が出来ているかということ自体が問題となる。その意味で、この書評は、様々な限界を意識しつつ書かれたものである。筆者の真意を把握しない書評は、筆者を打ち、また評者自体を打つ。より一步、正確な内容理解を伴ったコメントが出来ることを展望しつつ一応ここで筆をおく。

注

【経済学と歴史変革】についての書評は以下である。

- 1 【エコノミスト】1990年7月3日号に、山田鋭夫が評をしている。これは、もっぱら「否定の否定」にかかわる箇所に焦点をあてたものである。
- 2 基礎経済科学研究所『経済科学通信』第64号、1990年10月号に西野勉が個人的所有の再建をめぐる、自著（経済学と所有）との比較で検討している。

- 3 『経済セミナー』429号, 1990年10月号で無署名での評がでている。若干引用しておこう。「現在の資本主義の状況や、ソ連・東欧諸国の激動に対していさかい触れることのない叙述は社会主義をめぐる、論理化を拒絶した最近の議論に慣れた読者には、いささか戸惑いを与えるものであるかもしれない。しかし、それはけっして著者の知的怠惰を示すものではない。——著者の鋭敏な歴史意識と、長い自問自答の末に獲得された厳格な方法論を垣間みることができるであろう。マルクスの可能性を、これまでの通説を一步踏み越えたところから照射しようとする重厚な試みである。」
- 4 『科学と思想』第79号, 1991年1月号に、友寄英隆が評をしている。賃労働を、尾崎は、その商品の売買関係—搾取関係に限定して捉えているのではないか。賃労働者は、商品生産者という側面をもっている。未来社会を「みずからを自立者として措定する」賃労働論との関連で論じるべきではないか。国家と世界市場の次元ではどうか。これら、プランを意識した批判を行っている。